通信簿

―プロ教師の重点はどこか

プロ教師はメタ認知力を育てる

関西外国語大学国際言語学部准教授
中嶋洋一

1 保護者からクレームがついたのはなぜ？

夜遅く、A男の保護者から電話がかかってきた。担任の先生と話がしたいのだという。どうも、A男が通信簿に納得していないらしい。母親は「同じ塾に通っているB君は、期末テストの点が悪かったのに、彼の方が通信簿の評定がよかった。子どもは不信感をもっている」と言っている。

翌朝、教科担任に聞いてみると、A男は提出物を何回か出さなかったということだった。すぐに、担任と教科担任に、A男の家に足を運び、評価内容と評価方法について丁寧に説明をしてくるように言った。

戻ってきた二人から話を聞いたところ、評価方法が、きちんと子どもたちに伝わっていなかったことが誤解の原因だったようだ。子どもは、テストの点数＝評定という図式で考えることが多い。年度当初に、教師側から「成績をつける際の視点」を示さずに、通信簿を渡してから「実はな……」と言うのでは、誰も納得しない。

2 「具体的な事実」を書けるかどうかが勝負

相手を納得させるのは、担任の力量だ。特に、通信簿において必要なのは文章力ではなく、「観察眼」である。

私が、今までで最も感心したのはN教諭の所見である。彼はいつも通信簿の提出が最後だった。締め切りに間に合わないこともあった。しかし、彼の通信簿の所見欄には、30数名の生徒たちに対し、一つとして同じ文章がなかったのである。

普通、教師は、いくつかパターンをつくって書く。事例も、運動会、文化祭、合唱コンクールなどの大きな行事に特化されており、励ましの言葉も似ている。学期末に、生徒に何を頑張ったか自己申告書を書かせ、それをそつなく使う。いわば、限られた時間内でこなす作業に長けているのだ。

しかし、N教諭は違った。理科担当ということもあって、「観察眼」が抜群であった。どうしてこんなことまで知っているのか、と驚くようなことまで書いていた。しかも、アイ（I）・メッセージで「～してくれてありがとう」「うれしかったです」といったポジティブ・メッセージで締めくくられていた。先にあげたような行事よりはむしろ、子どもが日常的にやっていたことを丁寧に見て、それを書いていた。

通常、所見欄には5行程度で書かれるとしたら、彼は小さい字で丁寧に8行ほども書き、書ききれない時は紙を貼ってまで書いていた。時間がかかるはずである。

誤解のないようにしておくが、量が大事だと言っているのではない。場面を詳しく描写するような「具体的な事実」がなければ、決して読み手には伝わらないということを言いたいのだ。

卒業式の日、彼の周りには多くの生徒たちや保護者の輪があった。雨の中、抱えきれないほどの花束をもったN教諭の前で、目を真っ赤にした卒業生たちやハンカチで目頭を押さえた保護者たちの長い列がいつまでも続いていた。